

私の楽隊修行時代

志賀 信雄

私の楽隊修行の第一歩はライブラリーの思い出で始まります。

27才の時にベルリン・ドイツオペラに入団しました。12月に試験を受け翌年の2月1日から仕事が始まるのですが、受かると思っていなかったし、オーケストラの経験はあってもオペラなど全く知りませんでした。年が明けてオペラとの契約が済み、最初の予定表を渡されたときは冷や汗が出ました。1日目《シモンボツカネグラ》、2日目《さまよえるオランダ人》、3日目《魔笛》、4日目《トスカ》、5日目《タンホイザー》etc。本番が毎日続いています、練習など予定表のどこにも無いのです。

基本的に、レパートリーに入っている曲は練習しないらしいのですがこれは大変とさつそくライブラリーに行き、1週間分のパート譜とLPレコード（当時はCDなど無かった）を借りて来ました。譜面7冊で厚さ15cmはあったでしょう。レコードの録音はライヴなので音が悪く、コントラバスなど何をやっているか聴き取れません。何とか必死でさらって2月1日初出勤。《シモンボツカネグラ》を弾いたのですが、それはもう大変でした。ドイツ人の重いテンポ感、リズム感について行けず、思い切つて弾くと必ず先に出てしまうのです。しばらくの間は本番が終わるたびに自己嫌

悪におそわれたものです。「今夜も又とび出した」「一緒に入れなかった」。それに給料がメチャメチャ高いので本当に申し訳なく思つたものです。

一番すごかったのは《ニーベルンクの指輪》全4曲でLPレコード16枚!!パート譜十数cm。聴くだけで1週間かかりましたが、オペラを退団するまでに全曲を4回弾かせてもらいました。日本ではおそらく経験出来ないだろうと思つたので、一度も降り番を取らなかつたのです。ホルスト・シュタインの《指輪》が最高でした。最後のページで鳥肌が立ち、なみだがあふれました。

毎日ライブラリーに通つて譜面をもらい、ひたすらさらうだけの日々。慣れるまで丸2年かかつたと思います。4年後に日本に帰つてN響に入団してからは、（今だから言える事ですが）とても楽でした。練習は必ず3日間あるし、何よりも演奏時間が短い。本番が終わつた時、こんなに早く帰つてもいいの?と思つたものです。（給料は半分になつたけど）。

うず高く積まれたパート譜の山。LPレコード。「ライブラリー」という言葉は、私の音楽家としての原点を思い起こさせるキーワードなのです。

●しがのぶお 本学教授(コントラバス)